

第227回くらしの植物苑観察会 2018年2月24日(土)

昔の人の身近な植物の利用について

—一年中行事と植物—

天野 誠(千葉県立中央博物館 植物学研究科 主任上席研究員)

年中行事の起源

日々のルーティンの生活の繰り返しにアクセントを与えるのは、季節の区切りに行われる年中行事である。中国から伝わったもの、それを日本風のアレンジした宮中行事が民間に広がったもの、日本の民間伝承によるものなど、その由来は様々である。年中行事の構成要素には、人の行為とそれに必要かあるいは象徴的な意味のある物が欠かせない。この中に植物由来のものが含まれる。

正月に関わる年中行事と植物

様々な行事や飾りがある正月を考えてみよう。お飾りの代表である門松様々な形のものがあるが、松と竹が組み合わせてある。以前はこれに歳寒三友である梅の枝が添えられていた。正月飾りにも、木々が葉を落とす冬にも、常盤の葉を付けるユズリハやウラジロ、色鮮やかなダイダイなどが使われていた。

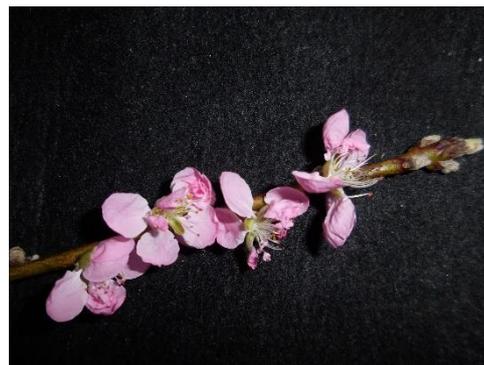
正月の床の間生けられる花にも、長寿の象徴の菊や松、難を転ずるという意味のシャレからナンテン、おめでたい名前のセンリョウなどが組み合わされている。鉢物としては、梅にヤブコウジ(十両金)をあしらったもの、福寿草をこけで被ったものが飾られている。

おせち料理の中にも、一年マメに働けるようにという黒豆、おめでたい色を表現した「紅白なます」、先が見通せるという意味でのレンコンなど、人の頭になるようにとの願いから雑煮に八つ頭など、少々強引ではあるが、植物の素材がおめでたい意味を添えて盛り込まれている。お年玉も元々は、みかんや餅が与えられた。1月7日の七草がゆの風習も、食用野草の採集を兼ねた野遊びに由来する。



五節句と植物

奇数月の同じ数字が並ぶ節句には、それぞれ象徴となる植物がある。元旦はすで述べているので、3月3日（上巳の節句）から始めると、モモが主役になる。モモは、中国古代から、少女の愛らしさの象徴であり、女の子の祭り、ひな祭りの飾りにふさわしい。5月5日（端午の節句）には、ショウブが主役になる。ショウブの名は、尚武に通じるので、男の子の祭りにふさわしく、かつては、束ねたショウブで、打ち合いをした。現在でも、薬効を期待し、匂いを楽しむために菖蒲湯の風習は残っている。7月7日（七夕の節句）には、タケが主役になる。各地の七夕祭りは有名だが、もともとは機織りの上達を願う中国の乞巧奠に由来し、それが様々な技芸の上達の願いに広がり、書字の上達を神に願うにいたって、竹に五色の短冊を飾る現在の原型の形になった。9月9日（重陽の節句）には、キクが、主役になる。菊に真綿を被せて、その露を飲むと長寿になるなど、数の極まった九にちなみ、長寿を願う祭りになった。



民間信仰に根ざす行事

また、2月の節分には、鬼払いの炒った豆をまき、イワシの頭とともにヒイラギを軒に飾り、鬼よけにする。これは、民話に由来する。3月のサクラの花見も、耕作前の予祝の意味がある。それに対応するのが、9月の月見で、秋の稔りを感謝して、月にサトイモや団子をささげ、ススキの穂を添える。

このように、年中行事と植物には、切っても切れない縁があり、目立たないながらも、暮らしを彩っている。

.....

次回予告 第228回くらしの植物苑観察会 2018年3月24日（土）

「樹木ウォッチング」尾崎 煙雄（千葉県立中央博物館 主任上席研究員）

13:30~15:30（予定） 苑内休憩所集合 申込不要